



KYORIN JEC

Summer 2006

KYORIN JEC

Summer 2006

Contents

海外研修だより

オックスフォード英語研修.....	2
シンガポール観光実習.....	4
中国深圳日本語教育実習.....	6
オックスフォード英語研修体験記.....	7
中国深圳日本語教育実習体験記.....	8

インターンシップだより

マンチェスター.....	10
帝国ホテル.....	11
JAL（日本航空）.....	12

学生生活だより

平成18年度学年暦.....	13
クラブ・サークル紹介（チアリーディング部）.....	14
クラブ・サークル紹介（ライフセービング・クラブ）.....	15
クラブ・サークル紹介（Slave to the Rythm）.....	15
クラブ・サークル紹介（剣道部）.....	16
クラブ・サークル紹介（吹奏楽部）.....	17
教務委員会より.....	18
学生委員会より.....	19
国際交流センターより.....	20
キャリアサポートセンターより.....	21
IT化推進委員会より.....	22

杏林大学の先生方の本の紹介

楠家 重敏 教授.....	23
原田 範行 教授.....	24
詹 満江 教授.....	25
長谷川弘子 助教授.....	26

杏林だより

新しい児童英語教育 豊田ひろ子 教授.....	27
新任教員紹介 谷口賢一郎 客員教授.....	28
鄭 英淑 講師.....	30
野口 洋平 講師.....	31

編集後記.....	32
-----------	----

2005年度第15回杏林大学 オックスフォード研修

～イギリスの風を感じて～

外国語学部助教授 高木眞佐子

《はじめに》

2005年度は、杏林大学オックスフォード英語研修の第15回目にあたる、節目の年でした。総勢18名の参加学生は8月21日に成田を出発、9月14日に無事帰国しました。

参加学生の所属学部内訳は外国語学部15名、総合政策学部3名、学年別内訳は、1年生2名、2年生13名、3年生2名、4年生1名。また、男女比は1：5でした。

参加学生は三週間余り、勉強だけでなく日常生活の隅々まですべて英語という環境に放り込まれ、英語力の向上を目指しました。しかしそれにもまして、「人間力」とでも形容すべき、根源的な生命力の成長が見られたことが、最大の成果と言えましょう。お仕着せではない「生^{なま}」の体験を味わったことが結果的に良かったのではないかと思います。



オックスフォードは、英国の詩人 Matthew Arnold が “that sweet city with her dreaming spires”（夢見る尖塔の都市）と呼んだように、コレッジの建造物が美しく独特の調和を保っている美しい場所です。そして穏やかで知的な大学都市であるのみならず、英国屈指

の観光都市という事情も重なって、中心街にはいつも国際的な活気が溢れています。

そんなオックスフォードの CIE (College of International Education) に到着した一行は、午前中は tutor の家を訪問するプライベート・レッスン、午後はグループ・レッスンもしくは体験活動、さらに週末は近隣への遠足というハード・スケジュールを精力的にこなしました。

《プライベート・レッスンとグループ・レッスン》

プライベート・レッスンは、文字通り tutor との一对一のレッスンで、学生の英語及び知的興味のレベルに合わせてさまざまな英語の授業が毎朝行われました。午後のグループ・レッスンでは、日本の「駄じゃれ」についてなど、かなり高度な内容を英語で説明する能力を身に付けた学生もいました。そこは学生の興味に合わせてトピックを工夫しながら、時にはゲームなども交えて行われる授業でした。この時、参加学生は英語で会話をする恥ずかしさをかなり克服したようです。



《体験活動》

1週目は雨にたたられ室内見学になりましたが、その後は予定通り、水路をボートで下るパンティング、Oxford University Press 見学、Trinity College でのクリーム・ティーなどの体験を楽しみました。また、オプションとして組んだ Randolph Hotel でのアフタヌーン・ティーや、グループ・レッスン後のパブ体験も好評でした。特にパブ体験はオックス

フォード滞在中合計3回行われました。



《遠足》

1週目は中世の Warwick 城とシェークスピアゆかりの Stratford-upon-Avon へ、2週目はオプションとして Windsor 城とローマ遺跡のある Bath へ出掛けました。

オプションであったにもかかわらずほとんどの学生が参加し、オックスフォードとはまた違ったイギリスを楽しんだようです。特に Windsor 城は人気が高く「はじめてから研修に含めてほしい」という声が複数上がりました。



《フェアウェル・パーティ》

大学主催のフェアウェル・パーティでは、司会担当が流暢な英語をアドリブでしゃべり、「たったの三週間でここまで伸びるのか」と添乗員も CIE スタッフも感心していました。

これまでは能力はあっても自信がなかったのでしょうか。参加学生に自信を何とか持たせるように工夫を重ねてくれた tutor に感謝することしきりでした。

《その他》

ホスト・ファミリーに予定を見せて話し合ってもかみ合わなかったり、バスの時刻表を確認したはずなのに間違ってしまったたり、シャワーが出なかったり、寒かったり、慣れないことづくめで辛いこともあったようです。

しかし、はじめの一週間は日本人だけで行動しがちだった彼らも、二週間を過ぎると外国からの留学生を交えて自然に行動するように、どんどん変わってきました。何よりも、「まずは自分でやってみる」という精神が定着したように思います。

もちろん、オックスフォード出立の日の朝、学生たちはホスト・ファミリーと涙、涙の別れをしてきたそうです。そして多くの学生が早速、帰ってくる約束もして別れたのだそうです。

最後の3日間は、ロンドンで自由行動でしたが、全員同じ学寮に泊まったため、学生らしい楽しい滞在になりました。参加学生は、添乗員の作成したプリントを元に、各自仲良くグループを作ってそれぞれ独自の「ロンドン探検」を楽しんでいました。

《終わりに》

今回、参加学生が更なる英語力を身につけるための大きな動機付けを得て、そして社会に出て必ず必要とされるたくましさと積極性を身に付けて、帰国してくれたことを実感しました。これからも、この経験を糧に向上を続けてくれることを願ってやみません。



シンガポール観光実習2005

外国語学部教授 岩崎 公生

マーライオンとフラトン・ホテル

2005年度で4回目を迎えたシンガポール観光実習は、9月4日より11日にかけてシンガポールとインドネシア領ビンタン島にて28名の学生参加のもと実施された。観光先進国シンガポールではホテル、レジャー・スポットなど観光インフラを見学体験し、同時にアジア・ホスピタリティを学ぶことを狙いとした。

ここ1～2年、シンガポールではホテル間の施設改修競争が激化しており、一方で香港ディズニーランド開業の対抗策として、2009年までにカジノを市内マリーナ地区とセントサ島の2ヶ所にオープンさせる予定である。市の新しいシンボルであるオペラハウスをすでに誕生させたシンガポールは、今後観光レジャーの面でもアジアにおける一大観光拠点として発展を目指そうとしている。

ビンタン島はシンガポールから高速フェリーでわずか45分の近距離にあり、インドネシアの元スハルト大統領がバリ島に次ぐ第2の観光リゾートとして、シンガポール資本の協力のもと開発した島である。



【ホテル見学研修】

シンガポールにはオーチャード通りとマリーナ地区を中心に、世界の高級ホテルチェーンが進出し軒を連ねている。宿泊利用したホテル・パンパシフィックはマリーナ地区にあって、現在当地で唯一の日系ホテル（東急電鉄系）である。

バックスペースを含めた館内見学のあと、ファンクション・ルームにてホテルの営業マネージャーよりホテル運営について講義を受けた。見学は他にシャングリラ、メリタス・マンドリン、コンラッド、グランド・メルキュールで実施した。



【ホテルカレッジ SHATEC 研修】 SHATEC でのテーブル・マナー講義

SHATEC には大別してホテル業コース、レストラン業コース、旅行業コースがあり、学校内には各種キッチン設備、レストラン、バー、ベッドルーム、パントリー、ワインなどの貯蔵庫を備えている。

カレッジ生たちは座学と実践をとおして即戦力人材を目指している。見学とテーブル・マナー講義のあと SHATEC が運営するホテル SHAVILLA でフルコース・ランチを取り、テーブル・マナーを実践した。

ここでは調理とサービスのすべてを SHATEC の学生たち自身が行っている。階

上では40の客室を運営しており食後に見学を実施した。

【食文化体験】

Mt.フェーバーでスチーム・ボートをエンジョイ

最終日の昼を除き全食つきであり、昼と夜に毎回趣を変えてグルメ体験を実施した。

シンガポール風中国料理、インド料理、モンゴル料理、インドネシア料理を堪能した。とくに寄せ鍋風スチーム・ボートは学生たちに好評であった。シンガポールはNYで人気のフュージョン料理の本場であり、ニュートン・サーカスのホーカーズ・センター（オープンエアの屋台村）では中国料理とマレー料理が融合したプラナカン料理を楽しんだ。

最終日午後の自主研修時間には、4人のグループ単位でアフタヌーン・ティとシンガポール式ハイ・ティ（ハイ・ティはアフタヌーン・ティと比べ食事比重が大きい）をラッフルズ・ホテル、コンラッド・ホテル、フラトン・ホテル（2001年開業の6つ星ホテル）の3ヶ所で体験した。



【ネイチャー・ツーリズム体験】

2日目、日曜日にシンガポールの最高峰ブキティマ山にトレッキングを行った。標高170メートルしかないが、海拔0メートルに近いところから登るので一気に登頂はできない。

樹齢200年を優に越すと見られる大木が密生しており、野生の小型サルが生息している。日本の淡路島くらいの面積しかないシンガポールにとって、貴重な自然林である。

シンガポール北西にサファリパークがあり、ここには日本の動物園では見られない動物が放し飼いになっており、学生たちのほとんどが自主研修時間を利用して見学を行った。

【ソーシャル・マナーの習得】 ピンタン・ラグーンリゾート

出発前、参加学生に対し事前研修を2回実施し、ホテルやレストランでのマナーなど一通りのソーシャル・マナーを授講したが、現地での実践度は80点というところでまずまずの出来であった。

シンガポールの高級ホテルではレストランやロビーラウンジの利用にあたり、ドレス・コード（装いの基準）を設けている。多くの場合シティ・リゾートにふさわしい“スマート・カジュアル”という装いを求めているが、学生たちはその意味を理解できるまでになった。



＊ ＊ ＊

参加学生が今後就職活動を始め、その延長上で実業社会に進出するにあたり、大きな成果を得て帰国したと確信している。

外国語学部 日本語教育実習 報告

外国語学部教授 本田 弘之

昨年（2005年）も9月4日から19日まで、中国広東省深圳市の深圳職業技術学院にて、「海外日本語教育実習」がおこなわれました。

杏林大学外国語学部では、毎年、日本語教師をめざす学生が現場で実践経験をつむことができるように、日本語教育実習を開講しています。この実習科目は杏林大学の別科の教室で、一学期間をとっておこなわれる『日本語教育実習』と、休暇中に校外において集中形式でおこなわれる『日本語教育実習』があります。どちらも、じっさいに日本語を学んでいる学生に協力してもらい、日本語を教える練習をさせてもらうのですから、日本語教師養成課程の「授業」の一部であるとはいっても、自覚と責任をもって実習にあたることが要求されます。そのため、この実習に参加するには、「日本語教授法演習 - 1 / 2」で優秀な成績をあげ、さらに「日本語教育実習」で指導をうけて、担当教師がその能力と努力を認めなければ、「日本語教育実習」に参加することはできません。

昨年に引きつづき、実習をさせていただいた深圳職業技術学院は、その名のとおり職業教育を専門とする、日本でいえば短大と高等専と専修学校を総合した学校です。実習はその学校の応用外国語学部でおこなわれました。現在、深圳・広州を中心とする珠江デルタには、7000ともいわれる日系企業が進出していますが、日本語ができる人材の養成が追いつかず、企業の人材争奪がますます激しく

なっています。そのため、学生も在学中に「使える日本語」を自分のものにすれば、好条件で就職することができるのです。そのような、学習モチベーションの高いクラスに入って日本語を教えるのですから、杏林大学の実習生には、かなりのプレッシャーがかかります。

今年、参加したのは、7セメスター4名・5セメスター9名の13人でした。すでに述べたとおり、この実習に参加するためには、事前にかなり厳しい指導をうけ、また学内で経験をつんできました。しかし、現実の教室で日本語を教えることは、そうとうに厳しく、実習生のなかには引率教員の前で泣きだしてしまったり、教室で授業が止まってしまい立ち往生してしまった者もありました。しかし、そんな苦い経験がなによりも、いい勉強になったと思います。そして、そんな実習生をやさしく指導し、見守ってくださった、深圳職業技術学院と応用外国語学部の先生方には、ほんとうに感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、実習に参加した学生は、帰国後、海外での就職をめざして活動をはじめたり、まだまだ足りないところがあることを自覚し、勉強をはじめたりしています。今後も努力をつづけて、ぜひ、日本語教師をめざしてほしいとおもいます。



深圳市内の客家民俗博物館

私が体験した オックスフォード2005

5 セメスター 滝澤 彩、山岸 未菜

去年の夏、私はオックスフォードへの英語研修に参加しました。以前、一度だけ旅行で海外へ行ったことはありましたが、ホームステイをすることも三週間外国で過ごすことも初めての経験で、始めは不安と緊張でいっぱいでした。

しかしそんな不安も、時間が経つと共になくなっていきました。それはやはり、友達や先生方が一緒に行ったこと、そしてホストファミリーやチューターの先生をはじめ、イギリスで出会った人たちが親切にしてくださったからでしょう。

食事面でも、「イギリスは食べ物がいまいちおいしくない」と聞いていたので不安でしたが、そんなことは全くなく、お店でも家でもとてもおいしい食事をいただきました。

授業は、午前中にプライベートレッスン、午後にはグループレッスンという二つがありました。私は特に、前者がとても有意義だったように思います。チューターの先生との一対一のやり取りは、イギリスで過ごす間の英語に対する自信につながりました。グループレッスンでは皆で色々な英語の表現法を学びました。

休日のアクティビティでは、みんなとだから楽しめるようなこともたくさんできました。特に私の印象に残っていることは、色々なお城へ行ったことです。周りの風景や中世の衣装を着た人を目にすると、まるでその時代へタイムスリップしたようでした。これは実際にその場に行かなければ味わうことのできない、貴重な体験でした。

グループレッスンの後には、友達と街の中を散策しました。始めは手探りな状態で、ど

こをどう行けばいいのかわかりませんでしたが、色々なお店を回り、歩き回るうちに、地図も見ずに自分たちだけで街中を歩き回れるようになりました。それがなんだかとても嬉しく、また驚きもしました。

夜には先生方にパブへ連れて行っていただき、お酒やイギリスの伝統料理を楽しみました。

最後の三日間はロンドンへ行きました。オックスフォードは緑が多く、歴史を感じさせる街並みでしたが、ロンドンはとても都会的で賑やかな所でした。ガイドブックを片手に、少し欲張って色々な所へ行きました。写真でしか見たことのない建物や風景が目の前にあることが信じられませんでした。例えば、ピーター・パンで有名なビッグベンや大英博物館、バッキンガム宮殿などです。

寮では、友達と過ごすということで、まるで修学旅行に来たような感じでした。しかしまた、このメンバーで共に過ごす日も残り少ないのだと、寂しい気持ちにもなりました。今回の研修を終えて、私はイギリスがとても好きになりました。そして、この中には書ききれない程たくさんの思い出を作ることでもできました。また、自分の英語力がまだまだなのということも実感し、ますますがんばろうと思いました。また機会があれば、是非もう一度訪れてみたいです。



中国での教育実習 異文化体験記

小柴麻衣子

この実習に参加して、教育実習の経験を得ることができただけでなく、自分自身の視野を広げることができたと思います。

教育実習では40人近いクラスを一日100分教えるということで、様々な困難に直面しました。教え方や、授業の工夫を夜遅くまで考え、教師をすることの難しさを実感しました。反対に、生徒の笑顔を見たり理解してもらえると、次の授業の励みになり楽しさも感じました。

また、二週間中国に滞在することによって、その土地の日常の文化に触れることができました。買い物にでかけたり、タクシーに乗ることでさえ日本と違う発見がいくつもあり毎日がとても充実していました。

教育実習を通して、日本語という語学だけでなく、中国とは違う日本のなにかを生徒に感じ取ってもらえたのではないかと思います。私もまた、中国の知らない部分に触れることができ、貴重な体験をすることができた実習だったと思います。



日本語教師になりたい ——反省と決意

阿部 恵

今回、中国での日本語教育実習に参加して、あらためて「日本語の教師になろう」と強く思いました。慣れない海外での生活ということもあり、体調を崩したこともありましたが、それでも中国で過ごした2週間は、私にとって非常に大きなものでした。学生たちは本当に人懐っこく、親切でした。実習は3回だけでしたが、授業の準備、現地の先生方や他の実習生の授業見学と、毎日学校に通いました。授業が思うように進められなかったこと。学生たちにうまく伝えられなかったこと。その時は「私は何をやるべきか」という事ばかり考えていて、学生たちの気持ちを考える余裕がなかったのだと思います。



職業技術学院の講義棟から

マンチェスター

One step of your courage changes you!

5th semester Ken-ichiro Saso

First, I would like to say to every one who had contact with me that thank you for what you have done for me in many scenes. From April 3 to July 3, 2005, I went to the U.K. to study English! That was my first experience to go to a foreign country. Before I went to the U. K., I had had two feelings. One was anxiety; the other was expectation. Now that I think back, perhaps it was natural to have such complex, uncomfortable feelings because a lot of things could be the matter of concern: the English life-style, English food, English sense of value, English culture, and especially the English language.

The very first day I arrived, it was terrible. I could not speak English at all. Now that I know how terrible my level of English was then, I can't believe why I decided to go to the U.K. at all. I couldn't tell anybody what I wanted. Can you imagine that? It is unlikely that we experience that in Japan, isn't it? Eventually, what really saved me from starving was my body language rather than English.

However, I finally realized that my English level was not the critical problem. The most essential thing is to show one's spontaneous enthusiasm. I would like to tell anyone who wishes to speak English about that.

If you try to speak English to a foreigner for the first time or if you don't have confidence of speaking in English, you might have to show more guts! Of course I also had the same sentiment. However one step of my courage took me to the New World which I had never known.

Fortunately, my classmates, host-family,

teachers, staff at my workplace and all the people whom I could call as friends changed me. They taught me in one way or the other how to contact with a person or how to speak in front of the big audience. I really loved such sunny contacts, which had been unknown to me when I was in Japan. I even think it is necessary if one tries to live with people from other countries comfortably.

When my class in Manchester started, I made up my mind to be positive. It is important for anyone starting a new life to be positive. So during the pause between lectures and lunch break, I did my best to talk with friends and teachers. All the friends and the teachers were friendly and funny. From such conversations, I learned a lot: particularly about religion. Japanese are not very religious. But some countries put special emphasis on religion, which is really interesting. Some cannot eat pork, cannot drink alcoholic drinks, must pray 3 times a day, must go to the temple to pray every Friday and so on. I learned about them in paper at school. Likewise, I could broaden my mind quite a bit throughout my stay in England.

Now I'm interested in many countries, their cultures, and their languages because my Manchester experience gave me things that I can't count with my ten fingers. What changed me was my decision there to make a small step forward. I hope you will get an equivalent chance to make one small, yet brave step forward.



帝国ホテル

帝国ホテルから学んだこと

5 セメスター 奥井由里子

私は帝国ホテル実習に参加する前からずっと疑問に思っていたことがありました。それは、「ホスピタリティ論」受講のときも、事前にホテルへ下見に行ったときも、実習に参加してから、帝国ホテルから講義に来た先生方や帝国ホテルの人たちの笑顔がどこか自分の笑顔とは違うと思ったことです。

どこか温かみのある笑顔。なぜ私は帝国ホテルの人の笑顔を見るとほっとするのだろうか？とずっと疑問に思っていました。

しかし、実習に参加していくにつれてその理由が、ひとつひとつの動作に心が込められていて、私たちにホスピタリティについて教えたい、お客様をもてなしたいという心からの思いが自然と顔にも出てきているからであることを知りました。

このたび5日間の実習を通して、サービスをするうえでいかに心を添えることが大事か、人と人とのつながりの重要性がどれほど大事かを知ることができました。

私は以前から人を喜ばせたり、人の役に立ったりすることが好きだったのですが、今回の研修で人のために役立ちたいと思える人はホテルで働くことに向いていることを知り、さらにこの長所を伸ばしていきたいと思えます。

この研修に参加して、ふだん学校では経験することのできない見学と実践の機会に恵まれ、また職場で働く人たちの生の声を聞くことができとてもよい経験ができたと思います。

今回の貴重な体験を絶対、将来に役立てるつもりです。

帝国ホテル実習で学んだこと

6 セメスター 宮下 遥

帝国ホテルで働いている方々は皆さんお客様に対する気遣い、思いやり、おもてなしの心を大切にしているのだと感じました。

働いている皆さんの目がキラキラ輝いていたのがとても印象的でした。それは自分自身の仕事に誇りを持っているからだと思います。

お客様と対面して働いている方々はお客様に夢を与えており、バックで働いている方々はお客様の夢を支えているということを知りました。

また、チームワークが一番大切であることも分かりました。私も将来お客様が満足してくれるような仕事、また自分にとってやりがいがある仕事に就くことができたらいいなと思っています。

帝国ホテルで働いている方々のように私も目をキラキラ輝かせるようになりたいです。

しかし私はアルバイト先でお客様と接するときに、まだまだお客様の気持ちを分かっていないときがあります。お客様の気持ちが分かるようになるまでには多くの時間や年月が掛かるとは思いますが、常に自分の中で探求していきたいです。

帝国ホテルで学んだことを忘れずに、これから先の自分の人生や就職に活かせればと思っています。



インターンシップだより

JAL（日本航空）

JAL インターンシップ

7セメスター 若見 奈央

私は入学当初から、航空業界での就職を希望していたため、観光業を中心としてサービスやホスピタリティなどを学んできました。その中でも、実際に職業体験のできるインターンシップは、私にとって大変貴重な経験となり、この経験によって自分自身も大きく成長できたと感じています。

二年生の夏に参加したシンガポール観光実習では、ホテル見学を通じて実際の現場から、ホテル業やサービス業について学ぶことができ、添乗員補佐も体験させていただきました。

そして三年生の夏には、日本航空のインターンシップに参加させていただき、成田空港で一ヶ月間、グランドスタッフという仕事を通じて多くのことを学びました。私は主に

ファミリーサービスという、小さなお子様の一人旅や、単身赴任のご家族に会いに行く方、ご高齢の方をシップサイドまでご案内したり、到着した飛行機から到着ゲートまでお客様をお連れするというサービスのお手伝いをしました。毎日たくさんの人との出会いがあり、今でも一人一人のお客様の表情が思い出せるほど、本当に刺激的で充実した時間を過ごすことができました。また、実際に働いている方からお話を伺う機会もあり、乗務員だけでなく地上スタッフや整備の方、すべての職種が一丸となって飛行機を飛ばそうとしている姿を拝見し、改めて航空業界に魅力を感じました。

これらの経験を通じて、サービス業の奥深さや社会人としてのマナーを学ぶことができ、なによりもこの貴重な時間を共有できた仲間や、様々な人と出会えたことは、私にとって言葉では言い表せないほど充実したものになりました。このような機会を与えていただき、お世話になった多くの方々や、先生方に本当に感謝しております。



平成 18 年 度 学 年 歴

春 学 期

平成18年

4/3(月)～4/7(金)
オリエンテーション、健康診断

4/9(日)
4月入学式(三鷹キャンパス)

4/10(月)
授業開始日

4/10(月)～4/15(土)
履修登録(英語学科、東アジア言語学科、応用コミュニケーション学科)

4/17(月)
履修登録(外国語学科1～4セメスター生)

4/18(火)
履修登録(外国語学科5～8セメスター生)

5/1(月)～5/2(火)
ゴールデンウィーク臨時休暇

7/8(土)
授業最終日

7/10(月)～7/12(水)
補講期間

7/13(木)～7/31(月)
定期試験期間

8/1(火)～9/30(土)
夏季休暇

8/25(金)～8/31(木)
追・再試験期間

9/22(金)
9月卒業式(三鷹キャンパス)

秋 学 期

9/29(金)
オリエンテーション(新入生、新4・8セメ)

10/2(月)
10月入学式(八王子キャンパス)オリエンテーション(新入生)

10/3(火)
授業開始日

10/3(火)～10/9(月)
履修登録(英語学科、東アジア言語学科、応用コミュニケーション学科)

10/10(火)
履修登録(外国語学科1～4セメスター生)

10/11(水)
履修登録(外国語学科5～8セメスター生)

10/28(土)～10/29(日)
杏園祭
杏園祭前後日休講(10月27日・30日)

11/11(土)
創立記念日

12/25(月)
年内授業最終日

平成19年

1/5(金)
授業再開日

1/10(水)
授業最終日

1/11(木)～1/13(土)
補講期間

1/15(月)～1/31(水)
定期試験期間

2/21(水)～2/24(土)
追・再試験期間

3/18(土)
3月卒業式(八王子キャンパス)

日程については変更する場合があります。

チアリーディング部 VIVACIOUS

芹沢まどか

こんにちは。チアリーディング部、VIVACIOUSです。私たちは1989年に設立されて以来、今年で18年目を迎えました。現役生である私たちは、直接1期の先輩方にお会いする機会があまりありませんが、チームを支え、伝統を守り続けてくださった先生方やコーチ、OGの先輩方によって、VIVACIOUSにしかない伝統は今も変わらずに受け継がれ続けています。私たちは現在、身体的・精神的・技術的な面での成長を常に心がけ、向上心を持って日々練習に励んでいます。タイミングはもちろんのこと、更なるパワーを備え、今までよ

りもさらに上回った演技ができるよう、新しい部活作りから始めています。

主な活動内容は、アメリカンフットボール部の試合の応援や、春に1回、夏に2回、冬に1回、代々木体育館で行われる大会に出場するために日々練習することです。それ以外にも、今年は例年以上に「チアリーディングは応援して、元気になってもらおうスポーツ」というチアリーディングの精神の原点に戻り、外国語学部の謝恩会や父母総会をはじめ、校内イベントにも積極的に参加しています。どのイベントも大変喜んでいただき、私たちの練習への活力となっています。最近は学生の部活離れが進んでおり、我がクラブも部員がだいぶ減ってしまいました。しかし、多くの方々にチアリーディングの楽しさを味わってもらうためにも、他校に負けないうくらいいつも笑顔で、チアに対する思いを強く持ち、頑張っていきたいと思います。



先日の方会総会にて撮った写真です。現在は4年生が就職活動のため、1年生と2年生の12名で活動をしています。

ライフセービングクラブ

村田やよい

ライフセービングとは水辺の事故を防ぐ事を目的とした監視活動、人命救助活動、またその技術向上のための競技を指します。部員全員がそのような活動に関わるライフセーバーの有資格者であり、夏季休業中にはそれぞれの所属する海水浴場などで監視活動をしています。夏以外の活動は大学内を始め、プール・海で週に3日程度行っており、夏の活動に向け、基本的な体力・泳力を付ける事はもちろん、心肺蘇生法や応急手当などの技術習得に励んでいます。また他大学・自治体・地域との交流を通じて、さらに幅広い知識・技術を獲得しています。

ライフセービングはまだ認知度の低い競技・活動ですが、「命を救うスポーツ」と認識し、大きな意義を感じています。また、ただ記録・結果を求めるスポーツとは違った、他にないスポーツとして部員全員で大変楽しんでやっています。

今年の夏も全国の海水浴場で監視活動をしています。海水浴に行かれるときは是非ライフセーバーに「杏林の人？」と声をかけてみてください！

海って、楽しい。



Slave to the Rythm

山下 航平

杏林大学、ダンスサークルの Slave to the Rhythm です。僕らのサークルは設立してまだ3年程しかたっており、まだまだ発展途上のサークルです。しかし、ダンスを愛する気持ちは誰よりも強く“好きだからこそダンスをする”という気持ちで皆集まっています。なので、学園祭や確定イベント以外にもサークル内でチームを作ってコンテストやイベント、ダンスバトルなどにも参加し、杏林大学ダンスサークルとして他大学との交流や地域のイベントハウスなどと積極的に親睦を深めようと活動しています。主なダンスジャンルは、HIPHOP全般、JAZZ、HOUSE、ROCK、BREAK、REGGAE です。今年は、新入生が30人近く入りまた一段とにぎやかで厚みの増したサークルになっています。なので、去年以上にサークルとしての発展、個人としての成長を目標に努力していこうと思っています。



夏合宿、茨城県波崎市で

2004年度
杏林大学学園祭



剣 道 部

主将 小川 純平

私たち剣道部は、関東大学学生剣道連盟に所属しており、文武両道を目標に日々稽古を積み重ね、部活全体のレベルアップを図っています。部員数は少ないのですが、皆やる気と根性はどの部活にも負けておらず、楽しい雰囲気の中にも厳しさをそなえた部活です。

最も大きな大会は、5月の全日本学生選手権の予選会から始まります。大会に向け春休みから技術向上を主にした短期集中の練習を行い各個人のレベルアップを図ります。

今年は全日本選手権大会の東京都予選会にも出場し、男子一人が次の大会へ進む24人の

一人に選ばれました。有名大学の対戦相手にも引けをとらず、素晴らしい試合でした。

9月には団体戦予選も控えておりますので、チームワークを大切に、夏休みも強化練習を行い、体力・技術の向上に励みたいと思います。部員、マネージャーともに募集しておりますので、ホール杏にある剣道場で気軽に声をかけてください。



実践を想定した試合稽古

杏林大学 公認クラブ&サークル一覧

CULTURE

情報メディア研究会
軽音楽部
吹奏楽部
写真部
杏林書道会
探訪部「ALK」
アートクラブ
Slave to the Rhythm
MARIN
ESSK
チーム FFOA
OZ
投資サークル

SPORTS

柔道部
男子バレーボール部
剣道部
ラグビーフットボール部
硬式庭球部
軟式野球部
硬式野球部
ベーシックスキー部
サッカー部
ソフトボール部
ハンドボール部
アメリカンフットボール部
バトミントン部
女子バレーボール部
男子バスケットボール部
端艇部
ライフセービング部
チアリーディング部
少林寺拳法部
自転車部
アウトドア部
バスケットボール同好会スピリッツ
トライアンフアルペンスキー部
WHITE FOX (軟式野球)
アスレチックサークル Feel
バレーボールサークル Vorce

吹 奏 楽 部

金子友紀子

こんにちは！ 私たちは週3回、水曜日と木曜日、そして土曜日に練習している吹奏楽部です。人数も少なく勉強との両立の中で励んでいるので、壁にぶつかることも少なくありません。しかし、そんな中でも皆で夏のコ

ンクールや冬の定期演奏会へ向けて1つの音楽を創り上げ、その壁を乗り越えていく感動は学生時代の忘れられない宝物になります。初心者からの入団も多いので、気軽に遊びに来てください！



教務委員会より

教務委員長・外国語学部教授 赤井 孝雄

4月より新しい外国語学部がスタートしました。従来の外国語学科1学科のもとで、専門外国語の語学力を基礎にして、A群からE群の5つの専門科目群を学生諸君が主体的に履修するカリキュラム（教育課程）をより先鋭化・明確化し、英語学科（英語ビジネスコミュニケーションコース・英語教育コース）、東アジア言語学科（日本語教育学コース・中国語ビジネスコミュニケーションコース）、そして応用コミュニケーション学科（表現メディアコース・観光文化コース）の3学科6コース制のもとで、実践的な語学力を基礎に、それを将来のキャリア形成に結びつけることのできるカリキュラムへと再編成しました。その結果、学部には2つのカリキュラムが存在しています。そこで、カリキュラムごとに、在籍学年での教育内容や留意点を記しておきます。

○ 3学科制でのカリキュラム

1年

初年度となる今年は、「ゆとり教育」世代に対する1年次教育の重要性に鑑み、次の4つの基盤教育を必修化し、相互に連動させて導入しています。

PEP（A Practical English Program）...学部独自の統一テキストを用い、文字に頼らず口頭表現を通じて総合的な英語力（1年終了時までにTOEFL 137点、TOEIC 460点、2年終了時までにTOEFL 150点、TOEIC 500点）を養成するプログラム。

CIC（Chinese for International Communication）...学部独自の統一テキストを用

い、実践的な中国語力（1年終了時までに中国語検定4級、2年終了時までに同検定3級）を養成するプログラム。

キャリア指導...自律した社会人・職業人へと成長するために必要な「人間力」を養成するプログラム。

ホスピタリティ実習...円滑なコミュニケーションの基礎となる「他者に対する思いやりの心」を体得するためのプログラム。

さらに、TOEIC IPテスト受験の義務化、海外との遠隔授業やe-learningの導入、国内外での語学研修の実施、留学制度の充実等、基盤教育をサポートするプログラムも導入することになります。

2年以降

2年生となる来年度は、上述の基盤教育を中心に、学科・コースごとの専門科目が一部始まります。また、就業意識をより高めるためのインターンシップ（職場研修）も始まります。コースに分かれて専門教育を本格的に受講するのは3年次からですが、それに備える1年間でもあります。

○ 1学科制でのカリキュラム

2年

5つの専門科目群（情報・言語・文化、英語・英米研究、中国語・中国研究、日本語・日本研究、国際観光・国際関係・地域圏研究）の授業が本格化すると同時に、専門外国語以外の外国語、いわゆる第二外国語の学習がスタートします。また、3年から始まるゼミナールのための入ゼミナール試験が実施されます。また、これまでは、1学期に1単位以上修得すれば次の学期へ進級できましたが、3年（4学期から5学期）への進級条件は62単位以上となります。この条件を満たすような履修計画を立てることが必要です。

3年

ゼミナールが始まり、専門教育がますます本格化します。大学生活の中で最も充実した一年ではないかと思います。同時に、卒業後の進路についても考えなければなりません。そこで、「現代日本社会特論」必修授業となっています。また、課外ではありますが、キャリア・サポート・センター（就職支援室）のガイダンスや各種講座を受けて、遺漏のないように心がけてほしいものです。

4年

ゼミナールに於ける研究や卒業論文作成という、いわば大学生活を締めくくる学習が中心となります。しかし、就職活動や教育実習のために授業への出席がままならないこともあります。それを十分計算して、卒業に必要な124単位の修得、それ以外の卒業要件を満たす履修計画を立てることが必要です。

学生委員会より

学生委員長・外国語学部教授 黒田 有子

学生委員会は学部の専任教員と学生課の職員とで構成されており、学生生活に関するあらゆる事柄を担当しますが、主たる仕事は学籍管理と学生生活支援の2つになると思います。学籍管理は入学から卒業まで通常4年間の学生の身分を預かりますので、住所や保証人の変更などの変化があった場合には速やかに学生課に届け出ていただくようお願いをしております。また、病気や家庭の事情などによって休学や退学をしなければならない時や、その事由が消滅したことによって復学や再入学をする場合の相談を受けることもあります。最近は学籍に無頓着な学生も時折見られますが、「在籍している」という事実に基づいて学業その他学生としての活動が成立いたしますので、このことを十分に意識して各種手続きを遅滞なく行なっていただきたいと思います。他方、学生生活支援には奨学金の募集と選考、クラブ・サークル等学生の課外活動に対する支援、今年は10月28日（土）29日（日）の両日に行なわれる杏園祭への支援、卒業アルバム制作や卒業パーティの開催など卒業関連事業への支援などがあります。

奨学金には学生支援機構や地方自治体のものの他に杏林大学奨学金があります。平成18年度からはこの内容が少し変わり、これまでのものに加えて入学生と在学学生を対象に成績優秀者に給付される報奨的な色彩を強めたものと、昨今の大規模災害の発生などをふまえて緊急時に特別に給付される枠が新設されました。また今年は奨学金の応募者も増加しました。なかには授業料や生活費にあてるばかりでなく、短期・長期の留学や海外研修に参

学生生活だより

加するためなど自分自身の学生生活に対する先行投資と考える学生や、なるべく早く自立したいという気持ちをもつ学生もあります。

また、キャンパスには保健センターと学生相談室が設置され、学生の心身の健康に対するケアの体制を整えております。保健センターでは医師である保健学部教員が常駐するシフトが組まれ、学生相談室は週3日開室されて専門のカウンセラーの先生2名が教職員からは独立したスタンスで各種相談に応じています。学生課を通してでも、また直接メールや電話でも予約することができるようになっています。

さらに、学生課でも今年度から夜7時30分まで職員が詰めるシフトを組み、6時限目終了時までの対応が可能となる体制をとっています。また、定期的に構内と近隣の路上においてバイク通学の学生等の交通安全指導を行い、交通事故防止にも努めております。

昨今の学生たちを取り巻く社会状況は決して楽観視できない側面ももっており、さまざまなトラブルに巻き込まれたり、思わぬ危険に遭遇する可能性も皆無とは言えません。無知であったり、未熟であったりすることで被害に合うことがないように、本人の自覚を促すことはもちろん、ご家庭とも連携して学生たちを見守っていかねばならないと思います。

八王子キャンパス全体でも、平成18年度をキャンパスのアメニティの向上を図る初年度と位置づけ、この夏休みから施設の改修等ハード面での環境整備を進めていくことになりました。これと平行して外国語学部でも、学生のやる気を積極的に後押しし、学生の横のつながりを広げていくことができるようなソフト面の環境作りを進めていきたいと考えております。今後ともご父母の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

国際交流センターより

センター長・外国語学部教授 塚本 尋

現代日本社会において、国際交流は国の死活に関わる大変に重要な事業であることはいまでもありません。本学もさまざまな形の国際交流事業に取り組んでいます。その中でも外国語学部はまさに学んだ外国語をつかって、当該国・地域との交流の第一線に立つ人材を養成するわけですから、多くの学生が海外に出ることになります。また、海外からの留学生も多数受け入れていますので、キャンパス内でも国際交流が実現できるのです。

杏林生の長期留学

海外の大学へ半年または1年間の留学をする学生のサポートをしています。イギリス、アメリカ、オーストラリア、中国、香港、韓国、台湾などの国・地域へ送り出しています。

今後も学部の教育の一環としてよりよい環境をつくるべく、協定先を増やす努力をしていきます。

杏林生の短期海外研修

夏休みや春休みに企画する研修旅行や、学期中に行われる約3ヶ月間のインターンシップ研修などを実施しています。オックスフォード、マンチェスター、シンガポール、中国河北、中国深圳、などへ行きます。目的は、語学研修、観光実習、日本語教育実習、インターンシップ研修などです。それぞれが特色ある研修で、参加した学生諸君は短期間でもまったく顔つきが変わるほどに大きな成果をあげて帰ってきます。

キャンパス内での国際交流

海外からの留学生は、八王子キャンパス全体で現在473名、そのうち外国語学部には247

人が学んでいます。日常的にまわりに外国人留学生がいるという環境ですから、学生諸君が一步前にでて交流を図ろうとすれば交流の輪はすぐにできるはずです。しかし、留学生も杏林生も友人づくりが不得手の学生が多いようで、自分たちの集団をつくりがちです。外国語学部では、1年次のキャリア指導というクラスタイムや、3、4年次のゼミナールが必修になっていて、少人数で留学生と日本人学生が席をならべて指導を受ける時間です。同じ課題に取り組む仲間としての自然な交流がなされ、よい関係作りの糸口になります。

キャンパスを飛び出して国際交流

地元の小学校からの要請を受けて、特別授業「国際理解」に留学生たちがゲストとして招かれました。各国の様子を紹介したり、給食を一緒に食べたりして、交流を深めてきました。留学生たちは日本人の普通の暮らしを知りたがっています。

家庭訪問ができれば

留学生が日本の友人のお宅を訪問するということはとても望ましいことです。ホームステイや、一日訪問、などが実現すれば、交流の輪はさらに広がります。各ご家庭のご協力を切望しています。ご子女の友人の留学生をお招きになってみませんか。ご家庭にとっても新たな素敵な体験となると思います。ぜひよろしくお願いいたします。

キャリアサポートセンターより

副センター長・外国語学部教授 小山 三郎

卒業年度が一年しか変わらないのに、こんなに学生諸君の就職状況が激変するものか、と痛感しているのが現時点での感想です。今年度の特徴は、企業の採用が早いということで

す。喩えて言えば、在来線から急行、特急、新幹線に乗り継いでいる状況ではなく、最初から新幹線に乗っているようなものです。

そうしますと、学生諸君は就職への心構えを早急に整える必要に迫られます。キャリア・サポートセンターの第一の仕事は、激変している就職状況を的確に学生諸君に伝え、そして指導することにあります。そのために様々な工夫をおこない、学生諸君のなかに溶け込もうと努力しています。たとえば、お昼休みに学食に出店を出し就職相談にのること、また断続的にミニ講座を開講し、面接、履歴書の書き方を指導していること、学内に企業人事採用担当者をお招きし、説明会をおこなっていること、就職準備のための合宿、資格取得のための講座開設等々、その活動は多岐にわたっております。

では学生諸君は、どうでしょうか。近年、早い時期にキャリア・サポートセンターの窓口を訪れる学生も現れております。そうした学生は、資格取得のための講座に積極的に参加したいとの意向を持ち、なによりも自分の将来を見据えております。

とは言うものの多くの学生諸君は、自分の意識を変えるのに苦労をしているのが現実です。なぜならば、学生諸君はこれまで進路の選択を両親、学校の先生方に委ねてきていたからです。大学を卒業することは、進路・人生を自分で模索することだ、と言われた時、戸惑いを感じるのももっともなことです。自分の個性を自分の言葉で表現することが求められる時の苦しみは、当事者だけしか理解できないでしょう。学生諸君は、大学入学まで全員が同じ軌道に乗ることを求められてきたのですから。

キャリア・サポートセンターの役割は、そのような学生諸君に将来を見据える資料を与え、ともに考える場を作り出すことにあります。就職をめぐる環境が好転するなか、次号では本年度の学生諸君の活動状況を具体的にご報告できると思います。

IT 化推進委員会より

委員長・外国語学部教授 本田 弘之

社会のあらゆるところで IT 化が進展しつつある現在、大学教育もその例外ではありません。とくに外国語教育は、インターネット環境の発展により、大きな変貌をとげようとしています。杏林大学外国語学部も、その変化の波にとりのこされることのないよう、いまでも情報処理の授業時間を設定し、コンピュータ・リテラシー教育をおこなってきました。

しかし、この2～3年間の IT 教育の進展は、単なるコンピュータを教える程度の領域にはとどまらず、授業・講義をふくむ教育のすべての面での IT 化を必要としています。また、そのような IT 化におくれた大学は、教育の質を問われるような状況になってきました。そのなかで、杏林大学の取り組みは、まだまだ「甘かった」といわざるをえません。

そこで、昨年4月より、全学をあげて IT 化への取り組みが実施されることとなりました。それは、一時期に多額の投資をおこない、一気に IT 化を完了しようという計画です。それにともなって、外国語学部も IT 化推進委員会がつくられ、この1年半にわたってハードウェア、IT 環境の整備をすすめてきました。現在までの進展はつぎのようなものです。

1 D 棟・E 棟の全教室に LAN コンセントを設置し、全教室に PC を導入

この措置により、外国語学部が使用する教室では、すべての部屋でインターネットと PC を使うことができるようになりました。

2 E 棟の無線 LAN 環境の整備

上記の有線 LAN コンセントの整備と並行

して、E 棟校舎内を無線 LAN エリアとしました。無線 LAN に対応した授業用ノートパソコンを導入したので、E 棟内であれば、すべての場所をコンピュータ教室として使用可能です。また、教員、学生が持ち込むノートパソコンも、セキュリティ保全のための簡単なチェックをうければ、ネットに接続することができます。

3 教室へのプロジェクター設置

同じく D 棟・E 棟内の大教室には本年度までに、また、すべての小教室にも本年度末までにはプロジェクターが設置されます。

4 事務処理の IT 化

WEB シラバス、WEB 履修登録、および WEB 成績評定など、事務処理も大幅にオートメーション化をすすめています。

5 授業への携帯電話の導入

杏林大学の教員が独自に開発した CRV システムは、携帯電話を利用して授業中にリアルタイムで出席をとったり、小テスト、アンケートなどをすることができるシステムです。外国語学部でも、このシステムが稼働しています。

このように、この1年で外国語学部の IT 環境は飛躍的に整備されました。また、外国語学部教員の IT 化教育への理解も、他学部にくらべてすすんでいるように感じられます。すでにオックスフォードとのインターネットを使用した英語の遠隔授業がはじまり、また、CRV システムを授業に使う試みもおこなわれて成果をあげています。

IT 化教育は、ハードウェアの整備だけでは完成しません。教員、学生のアイディアと積極的な意欲があってはじめて意義のあるものとなります。今後、この IT 環境をどのように生かしていくべきか、外国語学部の IT 化教育推進は、いま、第2フェーズに入ったところです。

W. G. アストン

—日本と朝鮮を結ぶ 学者外交官—

外国語学部教授 楠家 重敏

明治時代のイギリス人三大日本学者（ジャパノロジスト）といえば、アーネスト・メイソン・サトウ、バジル・ホール・チェンバレン、そしてウィリアム・ジョージ・アストンである。まえの二人には、サトウ文書、チェンバレン文庫といった膨大な資料群があり、そのためサトウとチェンバレンの人物研究も大いに進展している。しかし、アストン研究にはまとまった個人資料はほとんどなく、それゆえ伝記的研究はまったく皆無であった。こうした研究状況を克服するため、本書がつけられた。

W. G. アストンは1841年にロンドンデリーでうまれた。1864年にイギリス外交官として日本に赴任し、パークス公使のもとで対日外交活動に専念した。通常的外交官活動のかたわら、イギリス公使館では日本情報を獲得するための勉強会が日常的に開かれていた。午前中に外交の一般事務を終えると、外交官たちは江戸（東京）の町の中に飛び出して行った。古本を漁り、骨董屋のおやじと交渉し、芝居小屋を覗いたりした。イギリス外交官はこうした日本研究を仕事にしていた。彼らの日本に対する関心は高まり、ついには一流の日本学者に育っていく。

本書の主人公アストンはこうした人物のひとりであった。日本語を口語と文語に分けて研究し、それぞれの文法書をつくった。さらに「日本書紀」の英訳に成功し、外国人とし

て初めて「日本文学史」をまとめ、「神道」の研究にまで深く切り込んでいった。名前は従来からよく知られていた人物であったが、外交官活動にしろ、日本学者としての研究のあり方など不明な点が数多くあった。これをひとつひとつ事実を解明していったのが本書の特色である。

研究者のタイプは大きくふたつのタイプに分かれる。真っ白な何もないキャンパスにスケッチを描き、みんなの前に形を浮き彫りにする研究者、そして、それを踏み台にしてその研究を大きく発展させる学者（そのキャンパスに何色を塗ったら良いか議論をする）このふたつである。私はどちらかというところ前者に属す研究者である。私の研究を乗り越えて、アストン研究を大成してくれる学者の出現を鶴首の思いで待ち望んでいる。

蛇足をひとつ。本書は昨年刊行したものだが、今年になって国際文化表現学会賞を受けた。望外の喜びであるが、これを励みにまた精進していきたい。



航海記を読む面白さ

—「シリーズ世界周航記」

を刊行して—

外国語学部教授 原田 範行

今春、岩波書店から「シリーズ世界周航記」(全8巻、別巻解説1巻)の刊行が始まった。岩波書店には既に、世界の代表的な探検航海の記録や旅行記を集成した「大航海時代叢書」ならびに「旅行記叢書」があるが、今回の「シリーズ」は、現在の世界地図の完成と今日の国際情勢に密接な関わりを持つ18世紀後半の英仏による探検航海の記録に焦点をあててその内容を精選するとともに、航海家の日誌を、単なる歴史的な記録としてではなく、極めて重要な言語表現の一つと位置づけ、航海家は、時に文人や作家にも比肩しうる表現者でもあったという視点から内容を整備したものである。私は岩波書店編集部とともにこの「シリーズ」の企画構想に関わり、4月に別巻解説(共著)ならびにイギリスの航海家として世界的にその名を知られるジェームズ・クックの第2回航海日誌の翻訳(上巻)を上梓、さらに6月にその翻訳の下巻を刊行した。クックは、大規模な世界周航をその生涯において3回手がけており、第1回および第2回については、既に「旅行記叢書」の中に抄訳が収められているが、今回の拙訳は、「シリーズ」の方針に基づき、単一の航海の全体像を、しかも、一貫して最初に記された原稿を全訳することで、ヨーロッパ人にとって未知の海洋で探検航海を続ける航海家の肉声に迫ろうとしたものである。あえて第2回航海を取り上げたのは、探検航海の成果が大きいということもあるが、同時に、クック自身が入念に航海日誌を整備し、記録が充実しているためである。

航海日誌を読む面白さは、人間がさまざまな事象(特に前例のないような事柄)を認知しそれを言葉に表現していくさまざまなプロセスを実体験できるということにある。そこから、ふだん無意識的に使っている言葉の特質、その可能性と限界が見えてくる、ということだ。私たちは、実に多種多様な形で、情

報を言葉に表現し、それによって情報を共有し、コミュニケーションをはかり、そして情報を蓄積する。法律の条文も医者の記事もカルテも新聞や雑誌の記事も、皆、そうした言語表現の産物である。特に、ヨーロッパ人にとっては18世紀にあってもなお謎の多かった太平洋南部の海域やオセアニアの島々、そして南極大陸の地理的状况を一つ一つ確認していく作業であった当時の探検航海の記録は、まさに未知なるものを既知のものにする重要な言語表現であったと言える。その責務の重さを明確に意識していたクックは、日々刻々、遭遇する事象を入念に記した。だが、それだけではない。正確な実録を記そうとすればするほど、自らの推測や判断の妥当性を問わざるを得ない場面に彼は遭遇するのである。正確にして客観的な記述をしようとするほど、自らの主観が気になってくる——そもそも人間の言語表現の本質につきまとうこの問題を彼はどのように解決していったのか。彼の航海日誌の面白さは、まさにこの解決法を偉大な航海家とともに探求できるところにある。

今日の世界情勢の形成に少なからず影響を与えたクックの世界周航には、言葉を使う私たちが遍く共有するこうした言語表現の問題の核心が潜んでいた。それを、拙著および拙訳を通じて学生諸君とも共有できればと考えている。



(写真は、今年4月に刊行された拙著『新しい世界への旅立ち』(別巻解説)と拙訳『クック南半球周航記』)

李商隱と解語の花

—秘密の恋愛詩を読み解く—

(『李商隱研究』汲古書院 2005年12月)

外国語学部教授 詹 満江

昔の中国にはなぜ恋愛詩がなかったのでしょうか。恋愛そのものはあったはずなのに…。私の研究の出発点はそんな素朴な疑問にありました。中国古典詩の作者はほとんどが男性で、女流詩人はほとんどいません。文学の担い手は男性に限られていたと気が付くの

にそんなに時間は要りませんでした。中国の文学は昔から政治と深く結びついていました。戦国時代の楚の大臣にして「楚辞」の作者屈原は、楚の行く末を憂えていましたが、佞臣の讒言を信じた楚の王は屈原を国外に追放し、絶望した屈原は入水自殺を遂げました。それ以来、美人を求めて旅することに託して、聡明な主君を求める心を詠った屈原の「離騷」は、後世の詩人たちの手本となったのです。

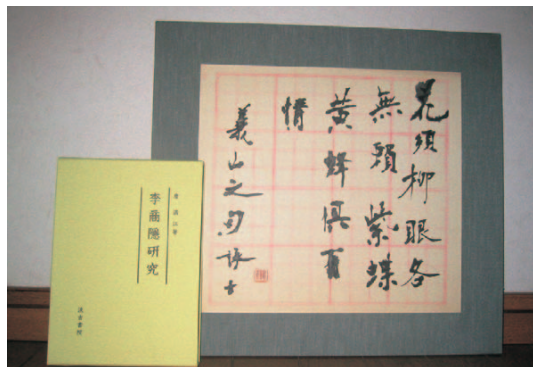
牛李の党争に巻き込まれ不遇だった李商隱が、李党の側にいながら牛党の有力者に贈った詩は、屈原の美人を求めることに託して聡明な主君を求める心に倣ったものだという解釈は、清朝の一部の注釈家たちの李商隱に対する好意的な評価の現われと言えるかもしれません。

昔の中国の詩人はみな官僚もしくは官僚志望であり、科挙（役人登用試験）の科目に詩があったのは、官僚として詩文の才が要求されたからでした。李商隱の詩の中には、確かに政治を詠った作品もあります。軍隊を持ち、皇帝の廃立さえも左右し、ときには皇帝を殺害さえした宦官の跋扈は、当時の政治の大問題でした。ときの皇帝が腹心の臣下と謀って、宦官を誅滅しようとして失敗し、かえって宦官の怒りを煽る結果となり、無実の宰相までが殺された事件について、李商隱は典故多用の手法で韜晦しつつ、密かに宦官を批判しています。もし宦官に知れたら命はなかったことでしょう。しかし、この詩人の詩風は読み手に容易に真意を悟らせません。読

み手に相応のレベルを要求しているのです。あたかも相当の目利きにししか秘蔵の美術品を見せない骨董屋に似ています。まあ、ちょっと気難しい詩人ではありますが、それが保身の術にもなったし、この詩人の魅力でもあるのです。

話は恋愛詩に戻りますが、一連の「無題」と題された李商隱の詩は、いまでも謎のままです。清朝の一部の注釈家が、屈原の「離騷」に倣って、李党の人に悟られないように牛党の有力者に送った詩だと解釈するのも文学史的には無理からぬことです。しかし、無題詩の中には明らかに恋愛詩としか考えられない作品があるのです。とくにアルバ（後朝の歌）は、男性同士の詩のやりとりと見るには相当な無理があるのではないのでしょうか。私は李商隱が女性に贈った詩ではないかと見えています。確かに女流詩人はほとんどいませんが、李商隱が生きた時代には、妓女を中心として、詩を詠む女性が増加してきたことが様々な史料からわかるのです。無題詩の中の女性の立場から詠われたアルバは、李商隱の作ではなく、女性の作である可能性さえあると思われます。なぜなら、アルバは女性を詩中主人公にして詠うほどにはまだ様式化されていなかったからです。

昔の中国の女性はまるで声を奪われた人魚姫のようです。いったいどれほど多くの人魚姫が言葉もなく泡となって消えていったことでしょうか。私は彼女たちの声なき声、心のつぶやきを李商隱という心優しい詩人を介して聞くことができたと思っています。唐王朝の落日を為すすべもなく見つめるしかなかった李商隱は、自分と同じ境遇の人魚姫に気付いた稀有な男性詩人だったと言えるでしょう。



著書と李商隱の詩からの抜粋

ドイツのファンタジー

『メドレヴィング』

—地底からの小さな訪問者—

外国語学部助教授 長谷川弘子

このたびキルステン・ボイエの『メドレヴィング—地底からの小さな訪問者』という本を翻訳しました。メドレヴィングとは、小さな人たちが住む地底の国の名前です。地底ですが、ちゃんと空があって、そこには花の好きな王さまのもとにやさしい人たちが住んでいます。そして、この国には幸せなことに魔法の力を持つエル・フェー（妖精）がいて、食べ物の心配がなく、お金も存在しません。

メドレヴィングの子どもたちは、空腹や餓死という言葉を知りませんし、裏切りやペテンなど悲しいできごとは「人間という不思議な生き物が出てくる物語のなかのこと」になっています。戦争や犯罪もなく、子どもたちは毎日なんの心配もなく外で遊ぶことができます。大切なことは、親切であること。そして、お祭り、笑い声、まじめな会話、おいしい食事を楽しむ踊り、いつもそばにいる友達、草原に寝転んで過ごす一日。あくせく暮らしている現代人にとっては、まさに夢の国です。

しかし、ある日この地底の平和な国に小さな事件が起こります。少年ニースの父親がどこかに消えてしまったのです。物語はここから動き出します。ニースは、友だちの女の子モアといっしょに父親を探すためにメドレヴィングをあとにします。二人が着いた場所は、ドイツの港町ハンブルク。ドイツ人の少年ヨハネスの助けを借りて、人間の町ハンブルクでの冒険が始まります。

わたしが面白いと思ったのは、この物語の舞台が現実存在する町ハンブルクだということです。著者のボイエは、メドレヴィングについてはおおまかな説明しかしていませんが、ハンブルクについては、通りや建物、観光名所の名前などをくわしく書きこんでいま

す。ボイエはこの物語を「ファンタスティックな推理小説」と読んでいますが、次々と起こる事件の舞台は、ハンブルクの倉庫街や運河になっています。

実在の町ハンブルクが冒険ファンタジーの舞台となる—じつはこれは、珍しいことです。『メドレヴィング』は、主人公が現実の世界から架空の世界へ迷いこむという物語ではありません。人間の子どもの目から見ると、メドレヴィングという不思議な国から「小さな訪問者」がハンブルクにやってくる話なのです。そして、人間世界にはじめて来たメドレヴィング人の目を通して、ハンブルクの風景、そして人間の生き方がくわしく描かれています。

いつもゆったりとしたリズムで暮らしているメドレヴィング人にとっては、人間の生活はあわただしいものです。どうしてあんなに忙しそうなのか？ 人間って他人と係わり合いにならないんだね？ 人間は草花が好きじゃないの？ どうして石で地面を固めてしまうの？

著者ボイエは、このように、メドレヴィング人の目を通して人間世界のちょっと困った面を描きだします。また一方、メドレヴィングから来たニースやモアは、人間世界のテレビドラマにすっかり心を奪われてしまいます。こんなに面白いものは見たことない！ しかも女の子のモアは、暴力的なシーンが出てくるギャングのドラマが大好きになってしまい、自分自身でも乱暴なせりふを口真似する始末です。ここの場面は、訳していても思わず笑ってしまいました。子どもの本を訳すのは、とても楽しいことだと実感した次第です。



キルステン・ボイエ著『メドレヴィング』三修社
(カバーイラスト 奥田ミキ)

新しい児童英語教育

外国語学部教授 豊田ひろ子

杏林大学外国語学部では、平成17年に八王子市立の小学校で学生による英語活動クラブのボランティア活動を開始した。また本年から小学校英語指導者の資格の取得を希望する学生を対象に、児童英語教師養成通信講座受講を始めた。学生たちは、毎週1回夕方6時から7時半に集まり熱心に勉強している。発音や文法の内容を盛り込んだ英語学習と同時に、第二言語習得、発達心理学、異文化理解教育、バイリンガル教育、教授法や教材活用など、様々な分野の関連文献を読み、児童英語教育の知識を深めている。英語問題やレスンプラン作成など、毎月提出しなければ

ならない課題があり受講者は真剣そのものだ。早口言葉に舌を巻き、歌に合わせて必死で振付を練習し、専門用語の連続に首を傾げ、それでも、和気藹々笑い合いながら一生懸命に取り組んでいる学生たちを見ていると、日本の未来が明るく思える。

英語活動クラブのボランティア活動は毎月2回のペースで実施している。3年生から6年生の約50人の子どもたちが毎回全員参加している。学校の諸先生方、保護者の方たちが、安全管理などの点で全面的に御協力下さっている。前半は全員一緒に歌や絵本の活動をするが、後半は分かれて中学年はゲーム、高学年はワークなどを行っている。いつも驚かされるのは、子どもたちの発音がネイティブの発音のように美しいことである。理解力も逞しい。「えーっ、英語だけじゃ分からないよぉ」と言いながらも、絵本に目が釘



高倉小学校での英語ボランティア活動



児童英語教師養成講座の勉強会をする学生たち

付けになり、いつの間にか、うんうんと頷いている。楽しい曲がかかると、自然に体が動き歌詞を口ずさんでいる。何よりも笑顔が素晴らしい。学生先生のお兄さんやお姉さんは優しく頼もしい先生たちだ。可愛い子どもたちのために、一生懸命頑張っているそんな先生たちにとって、子どもたちの笑顔が一番の御褒美だ。

児童英語教育が、子どもたち、学生たち、そして日本にとって明るい未来をもたらしてくれることを希望し、私はひとりの教師として最善を尽したい所存でいる。

再び英語教育に戻って

外国語学部客員教授 谷口賢一郎

4月から外国語学部でお世話になっております。20年ほど前に、ミシガン大学で英語教育論や識字教育を学びましたが、今またその経験が生かせることに喜びを感じております。ここ10年間は行政やマネジメントに忙殺され、本当にささやかな研究から脱皮することができませんでした。これからは、日本の英語教育の発展に向けていささか役立つことができるのではないかと、わくわくしております。

これまでの私の道のりを振り返ってみると、決して平坦なものではなく紆余曲折に満ちたものでした。そもそもの始まりは高校の教師をしていたときに、フルブライト留学生としてアメリカに渡ったことでした。異郷で学問をしたり、新たな経験をする機会が与えられたと同時に移動を常態とする生活パターンに陥ってしまいました。それゆえ、安穩、安定、普通というような人生からほど遠い緊張感に満ちた生活の連続でした。ただ、そのお陰で家族が2年間一緒にアメリカで暮らすこともできましたし、パキスタンやモロッコの文部省職員とアメリカ全土を旅することもできました。国内外の多くのすばらしい方々にお会いできたことも、楽しい思い出です。

幸い今まで、常に教育に関わっていたので教育を内から外から見つめることができました。特に英語はかつて高校の教師であったことや文部省で英語の教科書を調査する仕事をしていたので、大きな関心の的でした。長期間にわたり直接的、間接的に英語教育を見つめることができたことは、私の大きな財産です。

今、大学で教鞭をとるにあたって、日本の英語教育を概観してみると次のようなことが

言えるのではないのでしょうか。

一つには、グローバル化の進展によって、英語の果たす役割はますます大きくなってきたということです。国際的なビジネスやトップレベルの研究のみならず、英語に関わらずに現代を生き抜くことはほとんど不可能と言っても過言ではありません。それゆえ、どこでも英語教育に力が入り、英語学校が林立しています。

しかし、二つ目として、多くの日本人がなかなか英語を習得できず、もがき苦しんでいるという悲しい現実もあります。中学から大学まで約10年間も英語を学びながらその効果が見えないのは、学生時代に一生懸命に勉強しなかったからだとして自己批判をする人もいれば、教え方が悪かったのだと学校に矛先を向ける人もいます。

確かに、中学校や高校の授業を見ると、いまだに単語の意味と発音を調べ、英文をノートに写し、和訳するというパターンの授業が多く行われています。実際に英語を使うのではなく、英語の周辺知識を学ぶ授業も少なく

じるためには、言語の原点に戻って何らかの改革を行う必要があるでしょう。そのためにはまずこれまでの国内外の英語教育の研究と経験を整理し、教師個人の名人芸に頼るのではなく、もっと普遍的・科学的な授業を作り上げることが必要ではないのでしょうか。もちろん、教師が自らの英語力にさらに磨きをかけることも欠かせませんが……。

杏林大学は今年から外国語学部を大きく改革し、生きた英語を教えることができる教員養成コースを立ち上げました。カリキュラムには、中学校・高校の英語教師養成のみならず、小学校英語をも視野に入れています。そのせいか、学生諸君からは熱意と希望がオーラのように漂ってきます。彼らの発展にいくらかでもお役に立てればと思いつつ、たわわに実った杏の実を見上げながらキャンパスを行き来しているのがこの頃の私の姿です。



ありません。数十年前の、いや一世紀前の授業がそのまま踏襲されているのでは、誰もおかしいと思うでしょう。

今、英語を学んでよかったと多くの人が感

誠心誠意を尽くして

外国語学部専任講師 鄭 英淑

日本に来て今年で7年目になりました。主人の会社にて移動の辞令を受け、日本に来ることになりました。韓国で日本語学を学んだ私にとって、本場の日本で、専門分野の研究をさらに深められるいいチャンスになると思いました。当時、学位も取っていましたが、しかも年も結構取っていましたが、もう一度研究すると決断を下すのに一瞬の迷いもありませんでした。

このような私の熱い思いが通じたのか、幸いにも国際基督教大学大学院の比較文化研究科に入学することができました。さらにいい先生方に会い、色々なことを学び、経験しました。様々な問題もありましたが、努力が実り、もう一つの学位を取ることができました。

その間、初めて知っていくことの楽しさがすこしは分かるようになったようです。知っていくこととは、必ずしも学問的な知識だけを意味するのではなく、見ること、聞くこと、経験すること、学ぶことなど、すべてが含まれます。

日本での生活がけっして長いとはいえませんが、これまでたくさんの日本の学生と先生方に会い、さらに交流を深めて日本人たちと日本の文化を知ることができました。また、私の国である韓国の文化を紹介しながら、私自身と韓国の文化を再認識するようになりました。

これらは私の人生を、より深く、より広くしているような気がします。一般的な話になりますが、自分自身を知り、相手を知ることが、どんなに自分の人生を豊かにし、発展させてくれるのかを実感しています。

こちらの杏林大学で韓国語と日韓文化交流

を担当している私としましては、これまでの知識や経験を生かし、学生たちに韓国のことだけでなく異文化に触れられる場を作りたいと思っております。

そして互いの言語と文化を知ることを通じて自分自身を再発見し、発展させていけるよう誠心誠意を尽くしたいと思っております。



授業中学生達と：筆者前列真中



鄭 英淑 (チョン ヨンスク)

1987年 韓国高麗大学校日語日文学科卒業

1994年 韓国高麗大学校日語日文学科修士

2001年 韓国中央大学校日語日文学科
文学博士号取得

2004年 日本国際基督教大学比較文化研究科
文学博士号取得

【研究】日本語接辞「的」の成立と韓国語への流入
考察（修士論文）『西遊見聞研究シリーズ - 西遊
見聞 [語彙索引]』、韓国開花期資料に表れた外国地名の漢字表記研究（博士論文）津田真道の訳語研究（博士論文）法学・人権・民法・写真機・外国地名等の訳語成立に関する論文

観光を学ぶ、楽しむ、楽しくする

外国語学部専任講師 野口 洋平

○観光を学ぶ時代

「観光」と言えば“物見遊山”というイメージで、なかなか学問や大学とは結びつきにくいテーマのように感じられるかも知れません。そうした感覚はごく当たり前で、これまで社会科学の分野では、どうしても効率的な生産活動が可能になるか、つまり“いかに働くか”(または“いかに働かせるか”)を真剣に考えてきました。

しかし、これまで働く時間(と寝る時間)に対する“余り”と思われてきた時間、すなわち「余暇」(レジャー)の増加にともなって、今度は“いかに楽しむか”を考える必要性が出てきたのです。そして、もはや労働のために余暇があるのではなく、余暇のための労働があると言ってもいいほどのライフスタイルも見られるようになりました。

余暇の主役である観光を学ぶことは、現代の社会や文化を学ぶこと。新しい感覚と柔軟な思考でこの無限の広がりをもつテーマを考える時代です。

○観光と国際交流がもっと身近に

世界には「観光」を社会・経済・文化の中心として、積極的に展開している国や地域が少なくありません。そして、実は日本も「観光」を国の柱のひとつとしてとらえ、さまざまな取り組みを始めました。

その具体的な取り組みのひとつが「ビジット・ジャパン・キャンペーン」です。年間1700万人ほどの日本人の海外旅行者に比べて約700万人と少ない、現在の訪日外国人旅行者を2010年までに1000万人にまで増やそうという計画です。

日本を訪れる外国人旅行者が増えれば、私たちの生活の中で彼らと出会い、交流する

チャンスが増えます。彼らとのコミュニケーションの道具である外国語とホスピタリティ・マインドがあれば、私たちはそうした新しい時代を大いにエンジョイすることができると思います。

○観光を学ぶ、観光を楽しむ

「大学で観光を学ぶ」ことを分かりやすく言うと、「楽しむことが勉強 楽しませることが仕事」ということになります。観光学は“遊び”を考えます。どうしても自分が楽しむことができるか、また、どうしても誰かを楽しませることができるか、そしてそれがビジネスとして成立するかがテーマです。

私は、インターネットなどのIT(情報技術)と観光ビジネスの関係を考えています。具体的には、楽天トラベルやYahoo!トラベルなどインターネット旅行業のビジネスモデルを研究しています。

インターネットは、私たちの旅をより自由により豊かにしてくれます。近くに旅行代理店がなくても24時間いつでも旅行の予約・変更ができるし、携帯電話を使って旅行中のプランの変更・追加も簡単です。また、さまざまな旅行プランを内容や価格の面から比較検討することができるので、その時の気分や予算に合った旅が楽しめます。私自身もそんな新しい旅をエンジョイしています。



野口 洋平(のぐち ようへい)

1975年生まれ

1999年、立教大学社会学部観光学科卒業。2001年、同大学院観光学研究科観光学専攻博士前期課程修了(修士・観光学)。2004年、同大学院観光学研究科観光学専攻博士後期課程単位取得退学。東洋学園大学、東洋女子短期大学、七尾短期大学非常勤講師、鈴鹿国際大学国際学部観光学科専任講師を経て、本年4月より杏林大学外国語学部専任講師。川村学園女子大学観光文化学科非常勤講師を兼任。

編集後記

JEC 2006年夏号をお送り申し上げます。JEC は、杏林大学外国語学部の三つの柱の言語、日本語(Japanese)、英語(English)、中国語(Chinese)の英語の頭文字を繋げた誌名です。杏林大学の外国語学部学生諸君のご父兄に、今の外国語学部を紹介するのが、この JEC の目的です。

今号は、本学部に勤める専任教員の活躍する仕事の一端を紹介する特集号となりました。昨年世に出た書物を著した研究者一人一人が、その仕事を成し遂げた思いを読者の方々に伝えております。自分の出した本を人に紹介するのは自己宣伝をしているみたいで気後れを感じるものです。けれど、大学で教鞭を執る者の書物は、ともすると専門性が高いために、一般の読者にはなかなかわかりにくいと言われますので、結局そのような専門性を高度に持つ著者本人が紹介するのが一番手軽なのです。ご父兄の皆様には、本号で紹介した書物を著した研究者が、学生諸君の集う教室の中で熱弁を揮うさまを想像下さいますよう、切に願うものです。

KYORIN JEC 2006年 夏号

発行年月日	平成18年 7月28日
編集発行人	杏林大学外国語学部杏会 〒192-8508 東京都八王子市宮下町476 TEL 042 691 0011
印刷所	有限会社シーズ 〒186-0001 東京都国立市北 1 - 1 - 2 TEL 042 577 5995



<http://www.kyorin-u.ac.jp>



杏林大学
資料請求はこちらへ